

校長室の窓から

「誰かわかりますか？」

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、私は13年ぶり2度目の頓原中学校勤務です。着任から7か月が過ぎ、あらためて人とのつながりのありがたさを感じています。

ところで前任校も6年ぶり2度目の勤務であったことから、旧知の方々によく支えていただきました。とりわけ教え子たちには大いに助けられました。そんな前任校でのお話。



私が新米校長として四苦八苦していた5月のある日、教え子のFさんが訪ねてきてくれました。

「先生、わかりますか？・・・Fです。」と懐かしい笑顔。

その日はちょうど参観日で、弟の授業参観に、お母さんと一緒にきたとのこと。卒業以来でした。

Fさんは小学校ではミニバスケットをやっていて、チームのキャプテン。当時、小学校のバスケットチームは県内トップクラスの実力でした。そんなチームの中心選手としてやっていたFさんでしたが、中学校にはバスケットボール部がありません。だから、しかたなくバレーボール部に入ります。バレーボール部には、小学校時代の競技経験者が多く、初心者のFさんはなかなかレギュラーになれません。

『小学校ではスポーツ万能で、キャプテンとしてチームを引っ張っていたのに、今は足手まとい。』そんな思いから一時は退部しようとさえ考えました。

——Fさんは3年間ずっと控え選手でした。それでも、「7番目の選手」としての自分の役割を見つけ、最後までやり遂げました。

そんなFさんとの再会。積もる話に時間を忘れました。

会話の中で、ふと彼女がこんなことを言いました。

「今日は生活ノートを読み返してきました。」

「先生からのお返事を、ずっと読んでいました。」

「生活ノート、まだ、持ってるんだ。」と私。

「あたりまえです。」とFさんはきっぱりと言いました。

(「あたりまえ」か・・・)

私と毎日交わした「生活ノート」を、今も大切にしてくる。さらに読んでいてくれるなんて、ほんとに教師冥利に尽きるような嬉しいことでした。

とはいえ、当時のFさんの苦悩にたいして、役に立つアドバイスは全然できなかった。それから、ほんとうに私はFさんに寄り添い通したのかどうか・・・頼りない限り。

さて、新米校長だった私はその頃、いろいろな難しい状況の中で、実は思い悩むこともありました。

大人になったFさんは、そんな私の境遇が想像できたのでしょうか。そしてたぶん心配して来てくれた。で、会ってみると案の定「久村先生は苦悩中」。

私の目を見て、きっぱりと「あたりまえです。」と言ったFさんの強い言葉と真剣な顔。

『バーン』と背中を叩かれたような気がしました。

それからさらにこの日は、部活動の教え子S君とYさんの姉弟も訪ねてくれました。(これも弟さんが在学中。)

そしてこの日から、なんだかローテーションでも組んでいるかのように、教え子たちが校長室に来てくれたり、街で声をかけてくれたり。

何とも嬉しい限りでしたが、ひとつだけ困ったこと。

「私が誰かわかりますか？」というのが、どうもお決まりだったみたいで、特に夕暮れ時、メイクした女子に声をかけられて、しどろもどろ・・・絶対、わざとだし。

『お願いだから、ノーメイクで昼間に来て！』

という私の叫びもむなしく、その後しばらく、

「私、誰かわかりますか？ ははは。」というちょっといたずらな『襲撃(いや励まし)』が続くことになりました。

とはいえ、この襲撃(いや励まし)のおかげで、私は教師としてのモチベーションを、何とか保ち続けることができたわけです。

そんなこんなで今、「誰かわかりますか？」という言葉は、私にとって、その言葉の意味とは関係なく、温かくて、少しキュンとなるフレーズになりました。